調査報告

モンゴル西部バヤン・ウルギー県サグサイ村における 移動牧畜の現状と課題

Current Situation and Issues of Transhumant Animal Herding in Sagsai County,
Bayan Ulgii Province, Western Mongolia

相馬 拓也
SOMA Takuya

(2014年1月28日受付 2014年4月26日受理)

モンゴル西部アルタイ地域（バヤン・ウルギー県）では伝統的な季節移動型牧畜活動が、アルタイ系カザフ社会の生産体系の根幹をなす。しかし遠隔地かつ少数民族社会であることから、同地域ではいまだ生活形態などの基礎的知見が確立していない。本研究では、同県サグサイ村ブテウ冬営地(BWP)の牧畜開発・地域支援を視座に、滞在型のフィールドワークを行った。長期滞在による参与観察やウルギー県統計局の内部資料を参照し、①世帯毎の所有家畜総頭数・構成率、②家畜飼養・管理方法、③季節移動の現状、についての基礎的知見を明らかにした。その結果、BWPでは6割以上が貧困層世帯であり、最低限の生活水準にあることが確認された。また計画的増産や日々の放牧への人的介入は行われず、牧畜生産性の停滞など、アルタイ系カザフ牧畜社会が抱える現状と課題が明らかとなった。

The traditional transhumant animal-herding economy has continued to be a core subsistence activity in a community of Altaic Kazakhs in Bayan Ulgii province in western Mongolia. To achieve husbandry improvements and regional development as a central principle, basic social research based on long-term fieldwork was carried out from July 2011–October 2012 among 44 households living at the Buten Winter Pasture in Sagsai county. The primary focuses of this research were: 1) total livestock procession and proportion of each household; 2) local methods of livestock husbandry, herding, and management; and 3) recent modes of seasonal transhumance mobility. Through concentrated fieldwork, the current situation of and issues facing a contemporary Altaic Kazakh community are explained with some negative social factors such as a 60% poverty rate, lower living status of the poor, lack of traditional husbandry skills, and stagnation of herding productivity.

キーワード: アルタイ山脈, アルタイ系カザフ人, 牧畜社会, 家畜飼養, ポスト社会主義

Key words: Altai Mountains, Altaic Kazakhs, animal-herding society, livestock husbandry, postsocialism

I はじめに

モンゴル牧畜社会は1991年の民主化移行を機に、その社会体制や生産体系に急激な変更を迫られた。ソヴィエト式の集約牧業ネグデル（農牧業集団）の解体により、1991～1993年にかけて地方行政の所有していた家畜が個人に譲渡される「脱集約化」が実施された(Upton 2008: 178)。人々の多くが仕事を失う一方で、突然の独立経営を迫られる小規模牧畜世帯もこの時期に多数誕生した。

モンゴル人の「遊牧」とは異なる牧畜体系を有するモンゴル西部バヤン・ウルギー県(Баян Өлгий/ Bayan Ölgii) (図1) でも、少数民族「アルタイ系カザフ人」

図1 バヤン・ウルギー県の位置
Figure 1 Map of Bayan Ulgii Prefecture

による伝統的な季節移動型牧畜活動（以下、移動牧畜）への回帰が起こった。アルタイ山系の牧畜形態は、家畜飼養、生産管理方式、季節移動などの点で、モンゴル人の「遊牧活動」と共通点を有しながらも、独立した体系にもとづいている。同地域の複雑な地形は高低差を利用したいわゆる「移牧(transhumance)」の季節サイクルを可能とし、夏と冬の放牧地転用にもとづき、通年で夏冬2地点間もしくは春夏秋冬4地点間の移動が行われる。こうした牧畜形態は、山岳平野部と高原部を牧畜生産の拠点としてきた、カザフスタンやキルギスなど天山山脈の牧畜形態と類似する。モンゴル人の多地点間移動と比較すると、アルタイ系カザフ牧畜社会の季節移動は宿营地ごとの滞在期間と放牧地への負荷が大きい。また昨今は、所有家畜総頭数が少ないほど移動距離の短縮化が生じ、定住化の度合いが高くなる傾向がある。そのため、アルタイ系カザフ社会の集住単位「アウル」（モンゴルの「アイル」に相当）は固定的で流動性に乏しく、限られた土地への依存度が高まるため、モンゴル国内の他地域よりも放牧圧の増加や過放牧のリスクが高まる傾向が指摘される。

しかしこうしたアルタイ地域の牧畜文化と社会の実状については、遠隔地という立地面の理由に加え、家畜放牧数が寡少かつ生産力の乏しい地域であることから、対外的には研究対象とはなりにくかった。さらに国内では、「ディアスポラ型コミュニティ」「マイノリティ集団」「カザフ＝イスラーム社会」などの異質性が普遍化されることにより、アルタイ地域全域が疎外され、モンゴル人にとって自国内の関心対象となりにくい文化的・心理的土壤が築かれてきた。そのため、生活の根幹をなす牧畜文化だけではなく、カザフ特有の伝統文化などローカルな文化像が、モンゴル国内においてもいまだ未知の領域となっている。ただし、地元カザフ人の保持する鷹狩文化¹⁾が2010年11月、「UNESCO世界文化遺産」に指定されたことにより、近年その関心が内外で高まりつつある過渡期にあるともいえる。

II 対象地域と調査方法の概要

1. 本調査の経緯と目的

上記の現状を踏まえ本論では、同地域の先行研究の寡少と実態把握の必要性から、アルタイ系カザフ人の牧畜社会における基礎的知見の整備を目的としている。現地の牧畜活動の根幹をなす3つのテーマ、①所有家畜頭数の実数調査・構成率の把握、②家畜群管理・飼養方法の実態、③季節移動の時期・利用状況、について調査を行った。

2. 調査方法

本調査はサグサイ村西部に隣接する「ブテウ冬営地(BWP)」(行政区画上是サグサイ村5-Rバグ「bag (=行政区)」)に居住する44世帯(およそ全60世帯中)の牧畜民家庭を対象に行った(図2)。調査期間は2011年8月4日～2012年10月24日の期間でおよそ270日間、サグサイ村ブテウ冬営地の牧畜民家族(KS氏宅)への住込み滞在型フィールドワークにより実施した。調査方法は「参与観察」「半構成的インタビュー」にもとづき、その情報の多くは生活にとけ込みながら行った日々の顔合わせや、訪問時の「日常会話」「エスノグラフィック・インタビュー」などにより得た。季節移動の時期と場所については聞き取りを行い、一部を除きその夏営地での生活を実見した。

家畜頭数の定量的な把握については、対象44世帯($n=44_{\text{HHS}}$)の所有家畜頭数を特定した。またバヤン・ウルギー県統計局(Ulgii Statistics Office: USD)が2012年度に行った内部資料(非公開)も一部参照し、各家庭での聞き取り、実見・算出によりその増減等を補正した。また同局が2012年5月に行った家畜数量把握調査に同行し、一部の数値を得た。家畜頭数把握については、本調査への賛同およびコンセンツの取得できない牧畜民世帯については表記から除外した。

調査期間中には出産による子畜の再生産、病死・事故死が頻繁にあり、またヒツジ・ヤギについては、毎月1～2頭の食肉消費(または市場や他者への販売など)が行われた。そのため、特にヒツジ・ヤギの所有数(成獣・子畜)については流動的な数値($n=\pm 1 \sim 2$)であることを付記しておく。また家畜のヤク(*Bos grunniens*)および、ヤクと在来カザフ牛の種間混血牛

図2 サグサイ村と隣接する冬营地
Figure 2 Winter Pastures Neighboring the Sagsai Sum-Centre

「(カザフ語名) カイナック (кайнак)」は、便宜上「ウシ」区分として数量把握を行った。家畜年齢は現地の「数年 (=満年齢+1)」にて表記した²⁾。

モンゴルの地方行政区域は、「県(aimag)」「郡(sum)」「行政区(bag)」3層の行政単位により構成される。「群(ソム)」はカザフ語の対応語「村(сүм)」に対応し、本来は全村域を表す。しかし地域の人々は、村役場所在地を示す定住区域のみに使用している。したがって「ソム」「ソムセンター」をサグサイの中心部に限定し、「サグサイ」は村域を表す郡の意味で使用する。またモンゴル語の集住単位「バグ(集落)」にも、宿营地ごとの現地語名称が古くから確立されているため、カザフ語を踏襲して使用する。あわせて冬营地は「クスタウ(кыстау)」と呼ばれ、直訳すると「冬山」の意味となる。しかし冬季にウルギー市内の戸建家屋に移り住む際にも、その家を「クスタウ」と呼び表すため、「冬季宿营地」を全般する意味合いが強い。ただし現地語「クスタウ」の示す空間的広まり

を考慮し、本稿では「宿营地および放牧地」を包括する用語として「冬营地」また「夏营地」を以下使用する。

III 対象地域の概要

1. バヤン・ウルギー県の概要

モンゴル西部バヤン・ウルギー県に居住するアルタイ系カザフ人社会では、生活の手段として、現在でも伝統的な移動牧畜が地域社会の生産・経済活動の根幹をなしている。同県はモンゴル西端に位置し、県域は約45,705 km²で(Баян-Өлгий Аймаг 2012)、九州に沖縄本島を加えた面積とほぼ等しい(日本国土のおよそ8分の1)。アルタイ山脈一帯の大部分は、「山岳草原・ツンドラ帯(Altai Alpine Meadow and Tundra)」と「山岳性森林ステップ帯(Altai Montane Forest and Forest Steppe)」の2種類で構成されている(Heiner et al. 2011: 4)。アルタイ地域は土壌堆積の少なさから高木はほと

んど繁茂しておらず、ゴビ一帯を除くと森林植生が全国でもっとも少ない土地となっている。しかし反面、水資源の豊かな地域であり、県域の地表面の湖水面積はモンゴル国内でもっとも高い数値を示す(National Statistical Office of Mongolia (NSO) 2009)。地表面からの取水が容易なことに加え、タバン・ボグド(Таван Богд)山系、ツェンゲル・ハイルハン(Ценгер Хаирхан)山系などからミネラル成分の高い氷河の融水(glacial flour)が夏期には河川に流れ込む。

県内人口はおよそ100,800人であり、ウルギーと各村の定住者約32,000人を除くと、県内人口の約78,000人(78.0%)が、移動牧畜の従事者(以下、マルチン)である(NSO 2012)。県内人口の90%以上をアルタイ系カザフ人が占め、牧畜社会における季節移動や乳加工の形態をはじめ、その文化、社会、宗教、牧畜観も、モンゴル人の牧畜空間とは異なる文脈の上になりつつ。

同県のカザフ・コミュニティは、1860年代頃にはじまる中国西部(新疆ウイグル自治区)からの断続的な移住・流入により形成された(一説には1840年代から)(Diener 2009; Barcus and Werner 2010: 212)。バヤン・ウルギー県は1940年に事実上、カザフ人の自治県として成立し、1942年には現在の13村域が形成された。さらに90年代にカザフスタンが推進した「本国外」人口の呼び戻し(召還移民政策)により、断続的に人口が流出した。アルタイ地域に根づいたカザフ・コミュニティには、モンゴルではもっとも「新しい」移住集団であるにもかかわらず、中国やカザフスタンでは見られなくなった古式の言語と特有の無形文化「鷹狩文化」「刺繍やフェルト絨毯の製作」「馬技」など、牧畜文化と密接に結びつく伝統がいまも息づいている(スヘー 2007; Diener 2009: 162)。事実、カザフスタン国内では、「モンゴル戻りの」アルタイ系カザフ人は「貧しく」「遅れている」と同時に、「純粹で」「もっとも伝統的な」カザフ人という認識が広くあるといわれる(Dubuisson and Genina 2011: 477)。現在のバヤン・ウルギー県におけるカザフ牧畜社会とは、いわゆるモンゴル人の経験したポスト社会主義時代とは異なる社会・政治的背景にもとづく、人的流動の重層により形成されたといえる。

図3 サグサイ村中心部全景(西側より)
Figure 3 Sagsai Sum Center (from the West)

2. サグサイ村ブテウ冬営地と隣接冬営地

サグサイ村の中心部は、ウルギー市から約30 km西に離れたホブド河南岸に位置している(図3)。村の中心部には約220世帯、およそ2,000人が通年で居住している。村内には村役場、2011年に新装された病院、獣医病院1軒、学校と幼稚園が1カ所ずつ、銀行2軒、食料品・日用品を扱う雑貨店16店舗、地元旅行会社の天幕ホテル1軒、小規模ホテル1軒、ガソリンスタンド3軒がある(相馬 2012a)。ウルギー市からのアクセスの良さ、また例年9月の「イヌワシ祭(The Golden Eagle Festival)」の開催のため(Soma 2012a, 2012d, 2013a; Soma and Sukhee 2014)、観光客の往来は他村に比較して多い。特に春夏期5月～6月のブテウ冬営地では、牧草が美しく繁茂し草原の小花が咲き誇る。そのため、「伝統的カザフ遊牧民」の暮らしやエコ・ツーリズムを比較的手軽に体験できる観光ポイントとして、各旅行会社が競って旅行者を連れてくるようになった。ソムセンターと冬営地内には、旅行会社と提携して自宅を観光客への宿泊場所として提供する鷹匠家庭も5世帯ある。

ソムには5つの冬営地「ブテウ(Buteu)」「オルタタウ(Ortatau)」「カグルガト(Kaglugat)」「ウジュム(Ujum)」「ブクン(Bukun)」が隣接している(図2参照)。この冬営地区分は、1860年以降の断続的な移住以来取り決められた伝統・慣例上の区分といわれており、現在の地域行政上の区分もこれを踏襲している。例えばモンゴル国内では1924年以前、放牧地や季節移動先は伝統的な生態学的知見にもとづき決定された。その一

図4 冬営地の一般的な家屋
Figure 4 The Winter House in Winter Pasture

例としてアルハンガイでは、地域の有力な宗教指導者（ラマ僧）による放牧地の割り当てや季節移動の制限などが行われることもあった(Fernandez-Gimenez 2000: 1319)。サグサイでは冬営地範囲の決定についての起源や経緯、特定の宗教・思想の介入などは確認されていない。またBWPでは放牧地の所有権等は確認されていない。家屋の新設には村から許可を得る必要がある。他の隣接および遠隔の冬営地では、行政から土地を購入することで放牧地の一部を排他的に利用している場合もある。一例に滞在先KS氏の弟KE氏がサグサイ村の東端に位置する「サル・ジャマト冬営地」の一部を2003年に購入し、2家族のみで独占して利用している。ただしそうした排他的利用は、隣接冬営地の調査対象世帯では確認されなかった。

冬営地は平野部と山間部に大きく分けられる。ブテウとウジュムの2ヵ所は平野部、オルタタウ、カグルガト、ブクンの3ヵ所は山間部に広がる。通常、平野部の冬営地は河岸平野に営まれるため、牧草の生育や水利などの条件が良い。冬営地では日干し煉瓦造りの

固定家屋と、それに隣接して越冬用厩舎（屋根のない家畜囲い）が設けられる（図4-a）。屋根のある小さな厩舎も付設するが、これらは子畜のためのみに使用される場合が多い。家屋の裏手は冬季の燃料となる牛糞（テゼック）などが貯蓄される（図4-b）。山間部の冬営地ではマルチンの集住密度が低く、より広い放牧地面積を確保できるため、中規模～大規模家畜群の所有世帯が居住している。山間部では、固定家屋は山の斜面の南側、もしくは東側に近接し、風雪を避けるように建てられる（図4-c）。また水源から離れることもあるため、凍った氷を飲用水として貯蔵するスペースが家畜囲いの周囲に設けられる（図4-d）。

調査対象地のブテウ冬営地（およびカラガン集落とチイ夏営地を一部含む）には、約60世帯（息子夫婦などの同居家族除く）が滞在している（表1）。良好な牧草生育環境と水利に恵まれているため、集住密度が上述5地点の冬営地のなかでもっとも高い。ブテウ冬営地はホブド河支流の度重なる流域変遷により、春夏季はギルガイ状の湿地帯となり（図5-a～b）、きわ

表1 プテウ冬営地の所有家畜総頭数（各世帯毎）
Table 1 A Number of Total Livestock in BWP (at Each HHs)

対象世帯 (n=44HHs)	夏営地*	冬営地**	成獣						幼獣						総計
			ラクダ	ウマ	ウシ	ヒツジ	ヤギ	合計	ラクダ	ウマ	ウシ	ヒツジ	ヤギ	合計	
BWP-01	KSP	BWP	1	10	20	185	210	426		4	5	88	98	195	621
BWP-02	KSP	BWP			10	121	138	269		?	4	52	22	78	347
BWP-03	KSP	BWP		5	4	14	196	219			3	8	29	40	259
BWP-04	BWP _(KGN)	BWP _(KGN)	2	5	9	130	30	176		2	4	60	17	83	259
BWP-05	KSP	BWP		5	6		165	176		1	2	-	60	63	239
BWP-06	CSP	BWP			11	68	70	149			5	-	54	59	208
BWP-07	KSP	BWP _(KGN)		7	16	77	36	136		3	5	44	20	72	208
BWP-08	KSP	BWP _(KGN)				58	135	193							193
BWP-09	KSP	BWP		2	4	31	65	102			3	22	46	71	173
BWP-10	KSP	BWP _(KGN)		4	4	47	55	110		2	2	27	30	61	171
BWP-11	KSP	BWP _(KGN)		8	5	57	47	117		4	2	25	20	51	168
BWP-12	KSP	BWP _(KGN)		6	11	45	35	97		1	5	25	14	45	142
BWP-13	CSP	BWP			7	39	60	106			2	22	10	34	140
BWP-14	KSP	BWP		5	13	35	30	83		3	5	14	23	45	128
BWP-15	CSP	BWP _(KGN)		1	7	20	53	81		1	3	8	30	42	123
BWP-16	KSP	BWP		1	9	34	36	80		1	4	18	20	43	123
BWP-17	KSP	BWP _(KGN)		5	10	35	38	88		1	3	15	15	34	122
BWP-18	CSP	BWP			8	59	40	107			6			6	113
BWP-19	KSP	BWP		1	10	50	31	92			3	11	5	19	111
BWP-20	KSP	BWP _(KGN)		5	8	33	24	70		3	5	17	9	34	104
BWP-21	KSP	BWP		4	8	15	39	66		2	3	7	25	37	103
BWP-22	KSP	BWP _(KGN)		10	9	30	15	64		4	5	15	13	37	101
BWP-23	CSP	BWP		2	9	15	36	62			4	9	15	28	90
BWP-24	KSP	BWP _(KGN)		3	8	21	28	60		1	5	14	10	30	90
BWP-25	KSP	BWP _(KGN)		1	9	18	30	58			3	11	13	27	85
BWP-26	CSP	BWP			9	18	31	58			7	5	12	24	82
BWP-27	CSP	BWP			2	8	39	49		0	2	6	20	28	77
BWP-28	KSP	BWP	1	5	6	25	10	47	1	2	4	12	6	25	72
BWP-29	CSP	BWP		9	5	26	14	54		3	1	10	3	17	71
BWP-30	KSP	BWP _(KGN)		6	7	7	30	50		3	1	2	15	21	71
BWP-31	CSP	BWP		2	6	12	36	56		1	4		6	11	67
BWP-32	KSP	BWP		2	11	10	20	43		1	3	5	10	19	62
BWP-33	CSP	BWP			9	10	20	39			6	5	10	21	60
BWP-34	KSP	BWP			1	10	22	33			1	7	12	20	53
BWP-35	CSP	BWP		4	5		21	30		2	2	-	17	21	51
BWP-36	KSP	BWP _(KGN)		2	1	10	10	23			1	10	10	21	44
BWP-37	DSP	BWP		1	1	10	13	25			1	4	7	12	37
BWP-38	KSP	BWP _(KGN)		10	4	5	5	24		3	2	2	3	10	34
BWP-39	DSP	BWP _(KGN)		2		10	10	22			-	5	5	10	32
BWP-40	CSP	BWP		1	9	1	11	22			3	0	6	9	31
BWP-41	KSP	BWP _(KGN)			3	10	5	18		0	3	5	5	13	31
BWP-42	KSP	BWP		2	2	8	5	17		1	1	4	5	11	28
BWP-43	KSP	BWP _(KGN)			2		10	12		0	1	0	8	9	21
BWP-44	KSP	BWP				6	4	10		0	0	3	3	6	16
合計(頭):			4	136	298	1423	1958	3819	1	49	134	597	761	1542	5361
平均値:			1.5	3.8	6.8	31.0	40.7	78.9	0.5	1.3	3.1	13.1	15.8	31.3	110.2
中央値:			1.0	4.0	7.5	21.0	30.5	63.0	0.0	1.0	3.0	9.5	13.0	27.5	95.5
成獣/幼獣別構成率:			0.1%	3.6%	7.8%	37.3%	51.3%		0.1%	3.2%	8.7%	38.7%	49.4%		
全体構成率:			0.1%	2.5%	5.6%	26.5%	36.5%	71.2%	0.0%	0.9%	2.5%	11.1%	14.2%	28.8%	

* BWP: プテウ冬営地, CSP: チャイ夏営地, KSP: カッカ冬営地, DSP: ダイン夏営地

** BWP_(KGN): カラガン集落

めて良好な牧草地帯を形成する（図5-c～d）。南北およそ3.9 km，東西7.9 kmに広がり，その放牧可能な面積はおよそ28.5 km²のほぼ長方形の土地をしている。同冬営地の居住者は，運転業に従事する2世帯を除きすべてマルチンである。そのなかで電線を敷き，電気を使用できる世帯は第2サグサイ河より東側に居住する15世帯ほどである。通電工事には最低でも1,000,000_{MNT}（60,000円）前後が必要となる。しかし，日本のODAにより2004年頃からソーラーパネル電源が支給され，現在ほぼ全家庭に照明が行き渡るようになった。ホブ

ド河の北岸に広がる「アゲジャル山地」は伝統的な鷹狩の狩場として利用される（相馬2013a）。南側3.3 km地点からはトゲの生えたマメ科の低木「カラガン（*Caragana leucophloea*）」（Manibazar and Sanchir 2008: 64）が多数繁茂する環境となり，「カラガン集落（KGN）」と呼ばれ区別される。

図5 プテウ冬営地 (BWP)
Figure 5 Buteu Winter Pasture (BWP)

IV 結果と考察① 家畜総頭数とその構成率

1. 世帯毎の所有家畜総頭数と種別構成率

プテウ冬営地に居住する44世帯の所有家畜総頭数を調査したところ、成獣3,819頭、子畜1,542頭、合計は5,361頭であった(表1)。成獣家畜の平均所有数はおよそ78.9頭(子畜含めて110.2頭)となり、その内訳はウマ2.5頭(3.6%)、ウシ6.3頭(7.8%)、ヒツジ30.2頭(37.3%)、ヤギ40.7頭(51.3%)であった(BWP-01世帯の総所有数は外れ値として除外した)。ラクダ所有世帯は3家族4頭(0.1%)のみで、その利用方法は運搬目的であった。成獣と子畜の比率は71.2%/28.8%であり、全体の3割程度が春先に生まれた子畜であることが確認された。

全家畜の所有平均数で中央値に近いBWP-22の「101頭」を基準とし、世帯(HHs)毎に保有する成獣頭数100頭以下を「小規模家畜群保有者(Sg)」, 101～200頭を「中規模家畜群保有者(Mg)」, 201頭以上を

「大規模家畜群保有者(Lg)」の3グループに分類すると、Lg世帯6_{HHs}(12.5%)、Mg世帯15_{HHs}(27.6%)、Sg世帯26_{HHs}(59.9%)が確認された(表2)。調査対象世帯の6割がSg世帯であり、家畜群100頭以下の小規模経営で生計を立てていると思われる。数量調査で協力を得られなかったBWP西端の1世帯(BB氏ほか3世帯)では、合計1,000頭以上の家畜が共同放牧されている(目視確認)。さらにER氏が約350頭、KJ氏が300頭前後を所有しており、Lg世帯に分類される。これらすべてを合わせて概算すると、BWP全体の成獣家畜の放牧総数は7,000頭程度と推定される。家畜放牧密度は1頭あたり約4,000 m²と推測される。カザフスタンの山岳地域を参照すると、ヒツジ1頭あたり2～4 haが標準とされる(環境省2006: 24)。プテウ冬営地には良好な牧草環境が整っており、かつ一世帯当たりの所有家畜数が少ない反面、60世帯が隣接して集住しているため、放牧圧の高さが危惧される。さらに日帰り放牧による秋冬春期(10月～翌5月)の牧草地ローテーションが行われてない現状(後述V-1.)を加

表2 プテウ冬営地の所有家畜総頭数、平均、構成率（3区分毎）
Table 2 A Number, Average, and Proportion of Total Livestock in BWP (with 3 Groups)

対象世帯* (n=44)	成獣						幼獣						総計
	ラクダ	ウマ	ウシ	ヒツジ	ヤギ	合計	ラクダ	ウマ	ウシ	ヒツジ	ヤギ	合計	
Lg (n=7)	個体数: 0 構成率: 0.2%	32 5 2.1%	76 11 4.9%	595 85 38.4%	845 121 54.5%	1,551 222	0 0 0.0%	10 1 1.7%	28 4 4.7%	252 36 42.7%	300 43 50.8%	590 84	2,141 306
Mg (n=15)	0 0 0.0%	52 3 3.6%	113 8 7.8%	588 39 40.4%	703 47 48.3%	1,456 97	0 0 0.0%	22 1 3.9%	51 3 9.1%	226 15 40.4%	260 17 46.5%	559 37	2,015 134
Sg (n=22)	1 0 0.1%	52 2 6.4%	109 5 13.4%	240 11 29.6%	410 19 50.5%	812 37	1 0 0.3%	17 1 4.3%	55 3 14.0%	119 5 30.3%	201 9 51.1%	393 18	1,205 55
合計(頭): 構成率(%):	4 0.1%	136 3.6%	298 7.8%	1,423 37.3%	1,958 51.3%	3,819	1 0.1%	49 3.2%	134 8.7%	597 38.7%	761 49.4%	1,542	5,361

* 所有総頭数に応じて3グループに分類

味すると、過放牧の危険も十分指摘される。

2. プテウ冬営地の食糧自給状況

ザブハン県で行われた農牧業協同組合へのアンケート調査およびマルチンの意識調査によると、家畜保有数81～100頭規模以上が、生活苦なく生計をまかなえる一定の基準であるとの結果が得られている（ゲレルマー・佐々木2008）。プテウ冬営地では、ほぼ6割の世帯がかなり低い生活水準であることが確認された。ただしBWPでは、実生活の食糧供給事情に影響しない子畜が、所有総頭数の3割を占めている。そのため、成獣保有数の平均値78.9頭に30%を加算した100～110頭前後が、安定的な生活を営むひとつの基準になると思われる。家畜群構成率から考えると、その内80～90%は直接の食肉利用が可能なヒツジおよびヤギであることが望ましい。

全県の群構成率と比較すると、ラクダ、ウマ、ヒツジには差がないが、ヒツジの比率が3～4%ほど少なく、ウシは逆に3%程度多く所有されている。プテウ冬営地では、実生活におけるウシ（およびヤク）の乳利用依存が高いと考えられる。

ヒツジとヤギは3歳頃から食用とされ、10歳頃までにはすべて食用に供される。ただし10歳頃まで生かしておくのは、乳利用するメス個体か、種雄のみに限られる。そのためほとんどのオス個体は5～6歳頃までに食用とされる。ウマとウシの食肉利用年齢は、5～15歳頃までとされる。馬肉はカザフ名物の馬肉ソーセージ「カズウ」の調理に欠かせない。ウマ、ウシ、ラクダの三畜は、屋外での冷温保存が可能となる11月中旬頃に毎年一斉に屠られる。ラクダはプテウ

冬営地での保有数がきわめて少ないことから、屠殺および食肉利用は滞在期間中実見されなかった。特に貧困層の所有家畜総頭数50頭前後の世帯では、牛肉が食卓に上がることはめったにない。

ウマを所有しない家族は7世帯のみであった。ウマはおもにLg世帯以上で、例年11月の一斉屠殺により年間1頭程度が消費される。しかし夏季は馬乳酒以外での食料生産性が相対的に低い。馬乳酒の生産は夏牧場で行われ、プテウ冬営地では一般的には行われない。9月以降、プテウ冬営地で馬乳酒の生産を行っているマルチンは例年およそ4～5世帯のみで、自己消費分として搾乳が行われていた。しかし10月2週目頃までプテウ冬営地は湿地帯となるため、ウマは日常の移動手段としても欠かせず、ソムまで騎馬で通学する生徒も多数いる。

3. ヒツジとヤギの年間消費数と所有比率

ヒツジとヤギは日々の放牧では混牧され、故意に分離されることはない。プテウ在住のマルチン世帯では、ヤギが成獣家畜頭数の半数以上51.5%以上を占めている。一方ヒツジは全所有数の37.3%となり、ヤギへの生活依存が高い現状にある。ヒツジとヤギ2種類のみの所有比率は42.1%:57.9%で、ヤギがヒツジよりも15.8%程度多いことが分かる。

ヤギ所有数の卓越には、ヤギの経済生産性の高さが指摘できる。まずヤギはヒツジよりも3～5割程度安価に購入ができる。さらに飼育にあまり手間がかからず、牧草の生育状態にも左右されにくく、山地や岩部への適応性の高さなど生態上の理由がある。またヤギは例年のカシミア毛、ヤギ乳の販売益など、食肉利用

表3 サグサイ地域の所有家畜総頭数、平均、構成率（3区分毎）

Table 3 A Number, Average, and Proportion of Total Livestock in the Sagsai Region (with 3 Groups)

対象世帯* (n=125)		成獣						幼獣						総計
		ラクダ	ウマ	ウシ	ヒツジ	ヤギ	合計	ラクダ	ウマ	ウシ	ヒツジ	ヤギ	合計	
Lg (n=15)	個体数	13	266	326	3,408	1,879	5,892	3	96	131	1,663	835	2,728	8,620
	平均値	1	18	22	227	125	393	0	6	9	111	56	182	575
	構成率	0.2%	4.5%	5.5%	57.8%	31.9%		0.1%	3.5%	4.8%	61.0%	30.6%		
Mg (n=39)		36	249	304	2,378	2,526	5,493	11	83	126	1,112	1,089	2,421	7,914
		1	6	8	61	65	141	0	2	3	29	28	62	203
		0.7%	4.5%	5.5%	43.3%	46.0%		0.5%	3.4%	5.2%	45.9%	45.0%		
Sg (n=71)		9	187	350	1,263	1,592	3,401	1	65	158	607	800	1,631	5,032
		0	3	5	18	22	48	0	1	2	9	11	23	71
		0.3%	5.5%	10.3%	37.1%	46.8%		0.1%	4.0%	9.7%	37.2%	49.0%		
合計(頭):		58	702	980	7,049	5,997	14,786	15	244	415	3,382	2,724	6,780	21,566
構成率(%):		0.4%	4.7%	6.6%	47.7%	40.6%		0.2%	3.6%	6.1%	49.9%	40.2%		

* 所有総頭数に応じて3グループに分類

以外にも収益性が高い。ヤギの毛は毎年5月2週目頃から6月2週目にかけて、ほぼすべてのマルチン世帯で毛刈りし、ウルギーの市場へ販売する。Sg世帯ではこのカシミア毛販売が、年間を通じた唯一の現金収入の機会となることもある。カシミア毛の採毛および販売は2000年以降全国に広まり、特に貧困層でヤギ個体の重視に牧畜経営がシフトしている。

こうしたことから、日々の食生活ではヤギが多く消費されている。実際、滞在先の平均的なSg世帯KS氏宅（夫婦および4児：男20歳、男17歳、男10歳、女21歳）では、2011年4月～2012年3月の年間家畜消費量はヒツジ3～4頭、ヤギ10～11頭であった（食肉購入分含め）。加えてウマ1頭、ウシ1頭を親戚3～4家族で分配した。貧困層では、ウマ、ウシが毎年屠殺されることはほとんどない。Sg世帯以上では、ウマ、ウシに加え、ヒツジおよびヤギの年間消費数はそれぞれ10～12頭前後（合計20～25頭程度）が一般的である。ヒツジとヤギの消費数は、その年の慶弔事（結婚式、葬式、就学・就職祝い、その他季節の祭事など）によっても左右される。そのため家畜の贈呈・交換などは、貧困層ではほとんど見られなくなっている。一般的水準の生活を営むうえでは、毎月ヒツジ（ヤギ）2頭の確保が望ましいという意見も聞かれた。またウマとウシの消費は、裕福なマルチン世帯でも年間2頭以上自己消費されることは聞き取り・実見双方で確認されなかった。子畜の再生産が消費に追いつかないときには、裕福なマルチンから購入して自己消費分とする。貧困層は慶弔時や来客時などには、富裕者からヒツジを購入して消費に充てることも頻繁に行われる。実際にヒツジ・ヤギの買い付けは頻繁に行

われており、売手と買手の関係（隣人間／知人間／親戚間）もほぼ固定化される傾向がある。平均的生活を営むうえでの消費頭数は、表1で算出した子畜の種別平均所有数（ウマ1.3頭、ウシ3.1頭、ヒツジ13.1頭、ヤギ15.8頭）とかなり近い値を示している。この数値を見る限り、Mg世帯は例年の再生産のほとんどすべてを消費に回しており、例年の増産はそれほど期待できない。またSg世帯は平均的な自給生活を営む水準以下にあり、ぎりぎりの生活水準にあると考えられる。そのため、ブテウ冬営地に暮らす多くのマルチン家庭では、例年の家畜増産はほとんど期待できず、Lg世帯のみが例年の増産を享受している状況にあると考えられる。

牧畜社会の貧富の基準は、つねに「羊の所有数」を心理上の依拠として測られる。USDが集約したサグサイ村およびウランフス村周辺の125世帯の家畜実数把握資料（未公表）でヒツジ・ヤギの比率を見ると、Lg世帯($n=15_{\text{HHS}}$) 57.8%:31.9%でヒツジの比率が高くなるが、Mg世帯($n=39_{\text{HHS}}$) 43.3%:46.0%ではほぼ同数となり、Sg世帯($n=71_{\text{HHS}}$) 37.1%:46.8%でヤギの比率が逆転する（表3）。特に90～100頭規模の世帯を境に、ヒツジ比率がヤギに卓越する傾向がある。また所有する家畜総頭数が増えるほど、ヒツジの子畜再生産率も高くなる傾向にある。

ヒツジとヤギは2002年を境に、その国内放牧総頭数が逆転し、ヤギの占める割合が五畜でもっとも高くなっている(NSO 2012)。経済動物としての価値が普及していながら、それでもヤギは「富の指標」という文化的付加価値と心理面でヒツジにはおよばない。大規模なヒツジ群の放牧風景は、地元のマルチンにとっ

図6 モンゴル全国における放牧家畜総頭数の推移（過去10年間）

Figure 6 A Number of Total Livestock in Mongolia (over a Past 10-year Period)

でも羨望視される光景でもある。またKS氏一家では通年で毎日ヤギが食卓に出され、「たまにはヒツジが食べたい…」という子どもたちの思いがときおり感じられた。滞在先の若者（三男）も、通りがかりのヒツジ群を羨望視する光景がしばしば見られた。ヤギは現代のアルタイの牧畜社会における主要家畜種となり、ヒツジ以上に経済生産性に優れる反面、社会通念上の意味で「富の象徴」としての地位は与えられていない。

4. 家畜価格の高騰

NSO (2012)の統計資料「Database of Users」をもとにして、図6にバヤン・ウルギー県全域における10年間の家畜変動数を示した。BWPの家畜群保有数の位置づけを概観すると、2001年以降ラクダ、ウシ、ウマはほとんど変化がないが、2007年を境にヒツジ、ヤギともにいずれも減少傾向にある。この時期以降は全国的に地方部の人口も減少しており、家畜所有者の牧畜放棄・都市部への移住等も考えられる。ただし家畜の減少は全国規模ではなく、バヤン・ウルギー県、ホブド県、オブス県などの西部地域でより顕著に見られる。この家畜減少は家畜価格の高騰として、マルチンの実生活に大きな影響をもたらしている³⁾。

バヤン・ウルギー県内全域で、家畜価格はこの5年間で毎年1～1.5割程度で値上がりが続いている。これは定期的に家畜を販売できる機会が、少数の富裕なマルチンにほぼ独占されているためでもあり（KS氏家族談）、供給価格が需要価値により決定されてい

いことに由来する。また2009～10年冬の大規模な寒雪害（「ゾド(зуд)」）被害以降、全国的に家畜頭数が減少傾向にあり、家畜販売価に影響しているとも言われている（ブテウ冬営地居住者談）。この寒雪害では、Lg世帯でも壊滅的な家畜の大量死が発生した。

牧畜社会では食料の自給率がきわめて高く、BWP居住世帯の多くが生活に必要なジャガイモを自家栽培でまかない、タマネギなどは自生する野生種を採集して利用する。ソムセンターの南側は小規模な耕作地となっており、マルチン約25世帯ほどが各100m²ほどの畑を村から有償で借りている。またソム定住者世帯でも約6割が、庭先で耕作をおこなっている。定住者とマルチン世帯間の物々交換も頻繁にある。そのため、大多数のマルチン世帯ではコミュニティ外の市場などへの調達の必要と依存度が低く、現金の持ち合わせがきわめて少ない。急な出費の際には、安値でも家畜を売って現金を手に入れることとなる。アルタイ地域の牧畜社会では上記のような理由もあり、貨幣そのものがいまだに流通しにくい構造となっている。

V 結果と考察②

ブテウ冬営地での家畜群管理・飼養方法

1. 家畜の「自然（任意）放牧」

ブテウ冬営地では日帰り放牧、草原資源管理、種付け、肥育、分離放牧など、生産性向上や管理増産のための人的介入がきわめて希薄である。かつて、牧童が単独で良好な草地へ家畜群を数日から数週間連れて巡

a テケ

b コチュカル

図7 種雄ヤギと種雄ヒツジ
Figure 7 Breeding Male Goat and Sheep

回する分離放牧（「(モンゴル語) オトル(otop)」(カザフ語) オタル(otap)」)は、肥育を目的とした夏季におけるもっとも重要な牧畜手法であった。さらに日々の放牧にマルチン自身が同行することは少なく、実際には「日帰り放牧」はほとんど行われていない。

ヒツジ・ヤギ、ウシは毎朝5:00～7:00頃に搾乳され、その後は草地に放される。ヒツジ・ヤギ群にはマルチンは同行せず、一日中採草地の選定や帰宅時間を家畜群の自発性に依存する「自然（任意）放牧」（※本稿での便宜的な表現）に任せてある。この混牧群は自ら採食地を選定し、ヒツジ・ヤギ（加えてウシも）18:00～19:00頃には再び厩舎の周りに自ら戻ってくる。毎朝マルチンが騎馬で同行する「管理放牧」は、近隣ではKJ氏とBB氏親族の2氏を見かけたのみだった。この2氏は300～400頭規模の家畜群を有するため、毎朝ヒツジ・ヤギ、ウシなどを冬営地西側に広がる牧草条件の良い湿地帯へと追いやっている。その他のマルチンはときおり家屋の屋根に上り、単眼鏡で家畜の場所を確認する程度で済ませている。

採食時間をできるだけ長く採るため、ヒツジ・ヤギの厩舎への集約は20:30～21:00頃に行われる。ただし乳用牛については、冬営地では夕刻の集約時に濃厚飼料（ロシア製）が与えられる。現地では「ケベック」と呼ばれる濃厚飼料は、小麦粉ベースの小さなペレット状になっており、冷めた乳茶やお湯を加えて1～2時間ほどかまどの弱火で加熱し、おかゆ状にして与えられる。ウルギーの市場では一袋50 kgが20,000_{MNT}

（約1,200円）で販売されている。富裕者は越冬用にこのケベックをたくわえておき、交尾前の繁殖期や妊娠期間中に与える。購入に余裕のない家庭では、搾乳のためにとくに雌ウシにのみ与えられる。ヒツジとヤギへの濃厚飼料供与は見られなかった。

ウマはBWP内で自然放牧され、乗用の必要が生じたときに捕まえに行く。またウマは騎乗利用、搾乳、尻尾の調髪、診察、蹄鉄の交換、販売などの理由がない限り、集約されることはない。Sg世帯では、ウマの放牧管理はほとんど行わない。また馬群の滞在場所も大きくは変わらず、日々の捕獲時にだいたい同じ場所へ行行って捕まえる。ただし管理が特に希薄になる冬場には、馬群は食草活動で遠方の牧草地を自発利用するため、「迷い馬」を探して訪ね歩く訪問客が夕刻しばしば訪れる。

ヒツジ・ヤギ混牧群の輪郭形成には、種雄ヤギ（テケ）（図7-a）と種雄ヒツジ（コチュカル）（図7-b）が中心となる傾向がある。また厩舎内でもテケとコチュカルはもっとも奥まった場所か、囲いの角に居座る習性が見られる。こうした種雄の通年混牧はカザフ特有の放牧方法であり、アルタイ地域の西部モンゴル系遊牧民（トルゲート、ウリャンハイ）などの管理法では一般的には混牧されない。肉用ヒツジの放牧群では、群性の衰微が起こることも指摘される（三村ほか1988: 179-181）。しかしアルタイ地域のヒツジ・ヤギ混牧群では、自発的な食草範囲が限定されていることから、被管理群の離散などは頻繁には発生していない

(小型GPS装着による簡易追跡調査にもとづく)。そのため、ブテウ冬営地で「自然（任意）放牧」の手法が定着したひとつの理由と推察される。

大多数の貧困層の間では、種付けや交配による積極的かつ「計画的増産」は行われていない。ヒツジ・ヤギについては夏季7月～9月末頃まで、厳冬期における出産を控える出産調整のため、種雄ヒツジ、種雄ヤギの腰に厚手の布や古タイヤのゴム板を巻いて交尾させないようにする。ウマ、ウシは日々の自然放牧中の交配により、子畜を得ることも多い。種雄牛を保有していない家庭の雌牛が子牛を出産する事例が2012年5月に3件見られた。また滞在先家族でも2011年4月に、子牛1頭の出産があった。家族も種雄は把握していない。「種雄知らず」の子畜出産は頻繁にある。これは夏季にチィ夏営地(CSP)での共同放牧で集住した際に、隣接世帯同士のウシ個体間で優位な雄の群内順位が暫定され、流動的な群が冬季のBWP内でも維持・形成するためと考えられる。つまり種雄牛でなくても、上位の雄牛が日々の放牧で世帯間の家畜群を越えて交配が行われていると考えられる。種雄馬、種雄牛の所有率は特に貧困層に少なく、いわばウマとウシの再生産は自然放牧時の交配に任されている。

各家畜の種雄にはそれぞれ個別の呼称が与えられている。カザフ式の牧畜概念では、「種雄ラクダ（ボター）」は15～20頭に1頭、「種雄馬（アイグル）」は20～25頭に1頭程度、「種雄牛（ボカ）」は20～25頭に1頭、「種雄山羊（テケ）」と「種雄羊（コチュカル）」はそれぞれ100頭前後に1頭の割合で保有される。コチュカルとテケは「赤色（茶色相当）」が良いともいわれている（KS氏談）。この見きわめにはマルチン個々の経験が問われる。ヒツジおよびヤギの種雄は、8歳程度までその役を担わされる。種雄の交換が近くなると、例年3～4月の出産で良質な子畜を見きわめて、1歳以降「種雄候補」として育てる。種雄畜をウルギー市の家畜市場などで購入することはない。そのため良質な種雄が春に出生しないときは、世代交代を翌年まで先送りすることもある。また種雄は日々の種付けで体力を消耗し、肉や毛の品質が低下するため食用とはしない。歳をとって繁殖力が低下したり、冬季に食用肉が欠乏するなど、きわめて差し迫った状況にならない限り一般的には食用にされない。販売価

格も同種の個体に比べて2割程度安い値段で取引されている。

2. 自然放牧の問題点と課題

ブテウ冬営地で日々の「日帰り放牧」「計画的増産」「肥育」「分離放牧（オトル）」など、家畜群管理全般に多くの労力が割られない理由として、民主化移行時の90年代を通じて「再牧夫化」した労働者層が特に貧困層に多いことが挙げられる。そのため、伝統的な飼養技術や管理方法が継承・実践されておらず、個人世帯の牧畜経営そのものにも問題点が多数見いだされる。本来「遊牧民」には、自然と共生するために編み出した「生態学的伝統知(Traditional Ecological Knowledge: TEK)」の体系があり、新たな経験にもとづく刷新をへて世代を超えて受け継がれたとされる(Fernandez-Gimenez 2000)。しかしネグデルによる牧業の集約化を経て、モンゴルの伝統知の継承には深刻な断絶が生じることとなった。各地の担当牧夫に割り当てられていた放牧地や宿営地のほぼすべてが、1992年にはほぼ解体・譲渡されたとされる(Fernandez-Gimenez & Batbuyan 2004)。被管理家畜群の私有化とともに、伝統的牧畜生産の体系的な知識を持たない小規模牧畜民が多数創出され、家畜飼養や放牧管理のリスクが増したことも多数指摘されている(Fernandez-Gimenez 2000; 上村 2004: 9; ゲレルマー・佐々木 2008)。事実上ほとんどのマルチンが1950年代から90年代にかけて、ネグデルや集団農場(*Sangiin Aj Ahui*)での労働に従事した。サグサイ村でも特に40歳以上の世代が、集団農場や酪農生産工場（システム）での労働経験を持つ。そして家畜所有総頭数100頭以下の小規模経営者の多くが、90年代を通じて再牧夫化した「ポスト社会主義世代」のマルチンでもある。Sg世帯がその大半を占めることは、人為的管理による知識や経験の不足、希薄な増産志向にも由来している。

またBWPに定着した家畜群の自発的食草活動に依存した「自然（任意）放牧」という省力的牧畜手法は、この場所の牧草植生の豊かさ、地形上の恩恵を背景に行われている傾向がある。特定の人的介入をしなくても、家畜群を管理しやすいブテウ冬営地特有の地理的特性が挙げられる。同冬営地は河川に囲まれた放牧地であり、ヒツジ・ヤギが渡河して遠隔地へ行く

図8 サグサイ村の夏営地(KSP & DSP)位置図
Figure 8 Map of Detached Summer Pastures (KSP & DSP)

ことはない。河川の凍結時でも、ヒツジ・ヤギ群がすすんで凍結河川を渡ることはほぼ見られない。河川の上に砂や砂利を敷いて足を滑らせないようにし、かつ牧夫が背後から追い立ててようやく氷の上を進む。ウシは朝の放牧がはじまると、ある程度定まった草地に群れて向い、夕刻には再び厩舎へと戻ってくる。また、各家庭の家畜所有数が100頭未満であり、被管理群の管理・追跡が比較的容易なことも挙げられる。そのため自然放牧に任せる手法がブテウ冬営地では定着するようになったと考えられる。

VI 結果と考察③

季節移動と夏営地の現状

1. 遠距離移動の場合：カッカ夏営地へ

家畜の保有数は、現代の牧畜空間では季節移動地を決めるための要素となっている。季節移動の移動場所と時期は古来、家畜飼養のための牧草資源の確保と、コミュニティ内の力関係による放牧地利用制限などの社会関係との折り合いにより、かなり明確に決められていた。しかし現在では、季節移動先の選定は草地資源の状態に限らず、家畜保有総頭数、家族構成、親族関係、行政上の規定・境界、経済事情など、その理由は多様化している。一方で行政区（ソム）内の季節移動が事実上制度化されており、マルチン個人の自由な

意思決定にもとづく移動地の選定は行われない。

夏季の移動は例年6月5日～15日の間に行われ、遅くとも6月20日頃までには夏営地へと移動する。この移動時期は現在、行政指導によってほぼ義務化されている。現代のアルタイでは、通常は夏営地／冬営地の2地点間、もしくは秋営地を加えた3地点間の移動が行われる。春営地を加えた4地点間移動はほとんど見られなくなり、調査地では5家族のみが確認された（後述）。9月にブテウ冬営地に戻っても、ほとんどの家庭は10月15日前後まで固定家屋の左側（南側）に天幕を立てて生活する。秋営地に滞在するマルチン家庭では、通常の2/3程度の小さな天幕を張る。短期間の滞在であることと、夜間の冷温に対応して室内が暖まりやすいことなどの理由がある。

ブテウ冬営地からの季節移動は、大別して「チィ夏営地(CSP)」「カッカ夏営地(KSP)」「ダイン夏営地(DSP)」の3カ所へ行われる（図8）。ブテウ冬営地の東側に隣接するCSPへ移動するマルチンは20家族、ツェンゲル・ハイルハン山麓のKSPへは18家族、DSPへは20～25家族が移動する。夏営地で9月1日までの80～90日間、長ければ9月末までの120～130日間を過ごし、その大部分が9月1日～7日頃には再びBWPへと戻ってくる。

特にKSPは標高2,600～2,900 mの冷涼な高原地帯に広がり、水利と牧草に恵まれた放牧環境が整ってい

図9 カッカ夏営地(KSP) (ツェンゲル・ハイルハン山麓)
Figure 9 Kakkha Summer Pasture (KSP) at the foothill of Mt. Tsengel Hairkhan

図10 チィ夏営地(CSP)
Figure 10 Chiy Summer Pasture (CSP)

る(図9-a～b)。BWPからの移動距離は最遠地点までの移動で約48.1 kmあり、自動車で3.5～4.0時間の距離にある。この場所には例年およそ60世帯が周辺から移動する。MgもしくはLg世帯の大部分がKSPやDSPへと移動する。そのため現代の季節移動は、家畜保有数に応じて遠距離と近距離に二分化する傾向が見られる。

2. 短距離移動の場合：チィ夏営地へ

チィ夏営地はブテウ冬営地の東に隣接しており、サグサイ村西端を流れるサグサイ川の東岸に位置する(図10-a)。ブテウからはもっとも長距離(直線距離)の家族でも7.1 km、短距離では2.8 kmの地点に移動する。BWP、ソムセンター、ウルギー市内からの移動者も含めて例年38家族が移動してくる(表6)。天幕が密集しており、小規模な家畜放牧のみが可能な夏営

地である(図10-b)。この夏営地には、移動せずに通年で滞在しているマルチンも4世帯ほどいる。BWPは6月20日以降、冬場に備えた草刈り場として利用されるため、夏季は原則としてウマ以外の家畜放牧が禁止される。またチィ夏営地では馬群の放牧は禁止されている。そのためCSPに移動するマルチンは、カッカ夏営地・ダイン夏営地へと移動するマルチンに委託して分離放牧するか、BWPに自然放牧させておく。サグサイ川西岸から3 kmのBWP東端には2009年より、南北1.5 kmの石垣の境界線が築かれている。夏季にこの石垣から西側で故意に放牧を行うと罰金が科せられる。放牧規制の管理はM氏宅が村から委託料を得て請け負っており、例年この石垣付近に幕営して牧地管理を行っている。

CSPに移動するマルチンの多くは、いわば実際には季節移動を行わなくても家畜群の維持が可能なSg世

帯にほぼ限られている。チィ夏営地の面積は東西3 km, 南北4.5 km, 総面積はおよそ13.5 km²程度しかない。北側一帯はホブド河南岸の沼地となっており幕営はできない。また自動車の頻繁な往来や、過密な集住環境での人と家畜による蹂躪のため、牧草の生育状態はきわめて貧弱である。またヒツジやウシの食べないアヤメの一種「ジャランガヤク (*Iris lactea*)」(Manibazar & Sanchir 2008: 246)が一面に繁茂しているため、大規模家畜群を健全に維持することは難しい。CSPへの移動は、村内行政により事実上は制度化された季節移動といえる。

3. 多地点間移動の場合：春営地・秋営地の利用

チィ夏営地を「春営地／秋営地」として利用するマルチンは、現在では5家族（Y氏、EC氏、UL氏、YB氏、SG氏）のみである。この家族は春夏秋冬の季節ごとにそれぞれの宿営地を持っている。このうちEC氏、UL氏、YB氏の3家族は親戚関係にあり、冬営地の滞在場所が異なるが共同放牧の必要から移動を共にしている。特にUL氏は例年8月28日～9月2日頃、カッカ夏営地からEC氏のいるチィ夏営地を訪れ、9月20日前後には2家族そろって村の南端のカラガンに移動し、10月20日前後まで過ごす。その後、それぞれ自身の冬営地（EC氏はオルタタウ冬営地、UL氏はカグルガト冬営地）へと移動し、5月10日前後までの約7ヵ月間を過ごす。かつて4地点間の移動は広く行われたが、現在は移動の手間とコスト、乾草利用の普及、子どもの通学などの理由から行われなくなっている。ブテウ冬営地およびチィ夏営地で4地点間移動を行うマルチンは、この5家族のみに限られている。

4. 季節移動の減少

季節移動回数の減少は、特定放牧地での過放牧の増加につながるという懸念が示されている(Laurie et al. 2010: 326)。貧困層は草をもとめてより移動する回数と距離が増加傾向にあり、富裕層は低下する傾向が2000年以降の早い段階で指摘されている(Fernandez-Gimenez & Batbuyan 2004)。ブテウ冬営地の現状はこれとは逆で、富裕世帯ほど遠距離の移動を行う。草地への定住性と放牧圧の高まりはむしろ貧困世帯の集住に由来し、過放牧を誘引する一つの原因ともなってい

図11 季節移動に用いるロシア製トラック
Figure 11 Russian Truck for Seasonal Mobility

る。

季節移動の省力化は、肥育に対する消極的な対応や、世帯毎の経済的な負担が理由に挙げられる。ラクダ所有者の少ないサグサイでは、現在の季節移動にはほぼ必ず大型のロシア製トラック（ゴチンタブ／タブンユス）などを村やウルギーから手配する必要がある（図11）。1日の借用料は移動距離にもよるが、ドライバーへの謝金込みで約40,000～50,000_{MNT}（約2,400～3,500円）が相場とされる。遠方の場合にはガソリン代が上乗せとなる。例えばブテウ冬営地から約50 km離れたカッカ夏営地へは、30,000～40,000_{MNT}程度（1,800～2,400円）が別途必要なこともある。トラック1台の荷台で、一軒分の天幕と内装品を乗せることができる。ブテウ滞在のマルチンで移動を自前のトラックでまかっている家族は、1世帯で確認されたのみである。また数家族が一緒に移動したほうが安上がりとなるため、親戚同士の移動・集住が一般化する一因になっている。かつて季節移動にはラクダ3～4頭で一軒分の荷物が運ばれた。現在でもダイン地方などの遠隔地では、トラックではなくラクダやウマの駄載による移動も行われている。必要に応じて駄載料を支払い、ラクダの複数所有者から借用することが一般的である。

また9月はじめの冬営地への移動も、各世帯に多数いる子どもの新学期が始まるため、この時期の移動が一般化ようになった。通学する子どものいない家族は、9月末～10月15日前後頃まで夏営地に滞在することもある。現代の季節移動は、牧草の生育状態や

放牧環境に必ずしも依拠するものではなく、いわば社会制度の規定に対応した牧畜生活のひとつの形式として存続している。

VII 結論—再牧夫化「遊牧民」の現状について

本調査ではモンゴル西部バヤン・ウルギー県サグサイ村の①「家畜保有総頭数とその構成率」、②「家畜管理方法」、③「季節移動」の現状および課題について予備的に報告した。

①ブテウ冬営地では、Lg世帯は7_{HHS}、Mg世帯は15_{HHS}、その他半数22_{HHS}はSg世帯であることが明らかとなった。また1,000頭以上の家畜保有者は2家族のみであり、BWP全体の成獣家畜の放牧総頭数は7,000頭前後と推定される。

②家畜管理の全般として、日帰り放牧、計画的増産、肥育等への人的介入をほとんど行わない「自然（任意）放牧」が行われる現状が把握された。この理由として、SgおよびMg世帯の大部分が90年代に「再牧夫化」した労働者層であり、伝統的な家畜飼養や管理方法の継承・実践が行われていない現状が確認された。

③BWPでの調査対象44世帯の季節移動は、家畜群保有数に応じて、遠方のカッカ夏営地(28_{HHS})およびダイン夏営地(2_{HHS})、また近方のチイ夏営地(12_{HHS})、3地点への季節移動が確認された。また移動しない家族は調査対象家族で2_{HHS}、CSP在住の非対象世帯で4_{HHS}確認された。季節移動の多くは世帯毎の家畜保有数に応じており、とくに小規模世帯は「季節移動の義務化」という社会制度に依拠することが明らかとなった。Sg世帯では実際に季節移動を必要としないマルチンも多数いることが見いだされた。

こうしたことから、サグサイ村ブテウ冬営地は典型的な「貧村」という印象を強く受ける。伝統的な家畜飼養技術や知識の消失とともに、肥育への消極的な取り組みと増産志向への希薄な対応は、ポスト社会主義時代を通じて創出された貧困牧畜民の典型的な態度といえる。また貧困層のほとんどが現金収入の機会を持っていないため、観光客や訪問者への執拗な金品要求となって表出することが頻繁に見られる。自らの経済的地位を忌み嫌う反面、貨幣経済の周辺に依存する

形で貧困脱出の機会を模索するという現状が、現在のBWPのマルチンには垣間見られる。モンゴル西部バヤン・ウルギー県サグサイ村ブテウ冬営地は、現代に生きる再牧夫化した「遊牧民」の直面する現状と課題を、典型例として示しているといえる。

謝 辞

本調査研究は財団法人高梨学術奨励基金「平成24年度研究助成」による研究計画に基づき行いました。高梨誠三郎会長をはじめ、財団および株式会社丸仁ホールディングス（東京都港区三田三丁目3-16）の関係者全ての皆様に深く御礼申し上げます。またサグサイ村で調査にご協力いただいたすべての村民の皆様にも、感謝の意を表します。

注

- 1) 同地域のカザフ鷹狩文化に特化した研究については次の拙論がある(Soma 2012a, 2012b, 2012c, 2012d, 2012e, 2012f, 2013a, 2013b; Soma and Sukhee 2014; 相馬 2012a, 2012b, 2013a, 2013d)。
- 2) 本論参照の家畜頭数、年齢、現地価格等はすべて2012年6月現在。現地通貨トゥグルク(₮: MNT)は1,000MNT=約60円、表示時間はウルギー県時間=GMT+7時間で表記した。本論中の植物名称は“Flowers of Hustai National Park (2nd edition)” (Manibazar and Sanchir 2008)および“Virtual Guide to the Flora of Mongolia” (Computer Centre of University of Greifswald. <<http://greif.uni-greifswald.de/floragreif/>>)の各項目を参照した。
- 3) サグサイ村における家畜価格1頭の村内相場は、現地通貨(MNT)で以下の通りとなっている(2012年10月時点)。ヤギ1頭100,000 MNT(約6,000円)、ヒツジ1頭150,000 ~ 200,000 MNT(約9,000 ~ 12,000円)、ウシ1頭800,000 ~ 1,000,000 MNT(約48,000 ~ 60,000円)、ウマ1頭1,000,000 ~ 1,200,000 MNT(約60,000 ~ 72,000円)、ラクダ1頭1,500,000 MNT(約90,000円前後)。

文 献

上村 明 2004. ポスト社会主義モンゴル国の牧畜における土地利用：開発の論理と遊牧の実践、「モン

- 「ゴル法研究会」於名古屋大学（発表資料）. http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/kamimura/docs/pastureland_use_in_Mongolia.pdf
- 環境省 2006. 21世紀初頭における環境・開発統合支援戦略策定（国別調査）カザフスタン共和国. 東京, 社団法人海外環境協力センター.
- スヘー・バートルガ 2007. ポスト社会主義モンゴル国における伝統の復興とエスニシティ: カザフ人社会における二つの儀礼をめぐる. 愛知県立大学大学院国際文化研究科論集8: 109–133.
- 相馬拓也 2012a. アルタイ＝カザフ鷹匠による騎馬鷹狩猟: イヌワシと鷹匠の夏季生活誌についての基礎調査. ヒトと動物の関係学会誌32: 38–47.
- 相馬拓也 2012b. アルタイ・カザフにおける鷹狩猟の民族考古学: 無形文化遺産としての狩猟方法と技術継承の基礎研究. 高梨学術奨励基金年報 平成23年度研究成果概要報告, 364–371, 東京, 財団法人高梨学術奨励基金.
- 相馬拓也 2013a. アルタイ＝カザフ鷹匠たちの狩猟誌: モンゴル西部サグサイ村における騎馬鷹狩猟の実践と技法の現在. ヒトと動物の関係学会誌35: 58–66.
- 相馬拓也 2013b. アルタイ＝カザフ牧畜社会における騎馬鷹狩猟の民族考古学: 無形文化遺産としての持続性に向けた複合研究. 高梨学術奨励基金年報 平成24年度研究成果概要報告, 327–334, 東京, 財団法人高梨学術奨励基金.
- ゲレルマー・ダナー, 佐々木隆 2008. モンゴルにおける牧畜経営規模についての一考察: ドゥルウルジン・タワン・エルデン農協の事例をもとに, 農林業問題研究170: 238–243.
- 三村 耕 編 1988. 『家畜行動学』養賢堂.
- Barcus, H. and Cynthia, W. 2010. The Kazakhs of Western Mongolia: Transnational migration from 1990–2008. *Asian Ethnicity* 11: 209–228.
- Diener, A. C. 2010. *One homeland or two?: The nationalization and transnationalization of Mongolia's Kazakhs*. Woodrow Wilson Center Press.
- Dubuisson, E. M., and Genina, A. 2011. Claiming an ancestral homeland: Kazakh pilgrimage and migration in Inner Asia. *Central Asian Survey* 30: 469–485.
- Fernandez-Gimenez, M. E. 2000. The role of Mongolian nomadic pastoralists' ecological knowledge in rangeland management. *Ecological Applications* 10: 1318–1326.
- Fernandez-Gimenez, M. E., and Batbuyan, B. 2004. Law and disorder: Local implementation of Mongolia's land law. *Development and Change* 35: 141–165.
- Heiner, M., Davaa, G., Kiesecker, J., McKenney, Evans, J., Enkhsetseg, T., Dash, Z., Vanchindorj, U., Baast, O., Dolgorjav, S., Radnaabazar, G., Donchinbuu, E., Lhamjav, O., Gongor, S., Girvetz, E., and McDonald, R. 2011. *Identifying conservation priorities in the face of future development: Applying development by design in the grasslands of Mongolia*. The Nature Conservancy. <http://www.nature.org/media/asia-pacific/east-mongolia-grasslands-ecoregional-assessment.pdf>
- Laurie, A., Jamsranjav, J., van den Heuvel, O., and Nyamjav, E. 2010. Biodiversity conservation and the ecological limits to development options in the Mongolian Altai: Formulation of a strategy and discussion of priorities. *Central Asian Survey* 29: 321–343.
- Manibazar, N., and Sanchir, C. 2008. *Flowers of Hustai National Park* (2nd edition). Ulaanbaatar, Hustai National Park.
- National Statistical Office of Mongolia (NSO) 2009. *Монгол улсын статистикийн эмхэтгэл (Mongolian statistical yearbook)*, Ulaanbaatar, NSO.
- National Statistical Office of Mongolia (NSO). 2012. Resident population, by aimags and the Capital 2003–2010 year. http://www.nso.mn/v3/index2.php?page=free_access
- Soma, T. 2012a. Contemporary falconry in Altai-Kazakh in Western Mongolia. In *The International Journal of Intangible Heritage vol.7.*, ed. A. Cummins, 103–111. Seoul: The National Folk Museum of Korea. <http://www.ijih.org/volumeMgr.ijih?cmd=volumeView&volNo=7&manuType=02>
- Soma, T. 2012b. Ethnoarchaeology of horse-riding falconry, In *The Asian Conference on the Social Sciences 2012: Official conference proceedings*, 167–182. Nagoya: The International Academic Forum (IAFOR). http://iafor.org/offprints/acss2012-offprints/ACSS2012_offprint_0271.pdf
- Soma, T. 2012c. The art of horse-riding falconry by Altai-Kazakh falconers, In *HERITAGE 2012 (vol.2): Proceedings of the 3rd International Conference on Heritage and Sustainable Development*, eds. R. Amoêda, S. Lira, and C. Pinheiro, 1499–1506. Porto: Green Line Institute for Sustainable Development.
- Soma, T. 2012d. Intangible cultural heritage of arts and knowledge for coexisting with golden eagles: Ethnographic studies in “horseback eagle-hunting” of Altai-Kazakh falconers, In *Proceedings of the International Congress of Humanities and Social Sciences Research*, ed. G. Tchibozo, 307–316. Strasbourg: Analytrics. http://www.analytrics.org/Documents/HSS_Actes_Proceedings_2012.pdf
- Soma, T. 2013a. Ethnographic study of Altaic Kazakh falconers. *Falco: The newsletter of the Middle East Falcon Research Group* 41: 10–14. <http://www.mefrg.org/images/falco/falco41.pdf>
- Soma, T. 2013b. Ethnoarchaeology of ancient falconry in East Asia, In *The Asian Conference on Cultural Studies 2013: Official conference proceedings*, 81–95. Osaka: The International Academic Forum (IAFOR). http://iafor.org/offprints/acss2013-offprints/ACCS_2013_Offprint_0108.pdf
- Soma, T. and Sukhee, B. 2014. Altai Kazakh falconry as

'heritage tourism': The Golden Eagle Festivals of western Mongolia. In *The International Journal of Intangible Heritage* vol.9., ed. A. Cummins, 135–148. Seoul: The National Folk Museum of Korea.

Upton, C. 2008. Social capital, collective action and group

formation: Developmental trajectories in Post-Socialist Mongolia. *Human Ecology* 36: 175–188.

Баян-Өлгий Аймаг. 2012. *Official homepage*. <http://www.bayanulgii.gov.mn/index.php>

〈著者略歴〉

相馬 拓也（そうま たくや）

東京都生まれ。ロンドン大学 東洋アフリカ研究学院(SOAS)修士課程修了，早稲田大学 大学院文学研究科博士後期課程満期退学。現在，カッセル大学エコロジー農学部 Watercope Project客員研究員。モンゴル西部アルタイ山脈および中央アジアの牧畜社会を中心とした人文地理学，生態人類学，民族鳥類学，ヒトと動物の関係誌(HAI)を専門とする。

カッセル大学 Watercope Project ホームページ <http://www.watercope.org/index.php/en/>